# 湖東の有力者達が信仰

## 永源寺

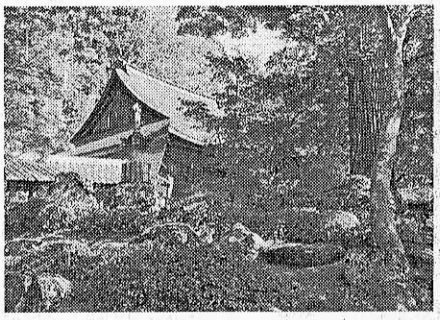
近江と伊勢を結ぶ八風街道が、愛知川に沿って山並みに入り始めたその場所に、臨済宗永源寺派総本山の永源寺があります。永源寺は湖東三山（西明寺・金剛輪寺・百済寺）とともに紅葉の名所として、多くの観光客が訪れることでも有名です。

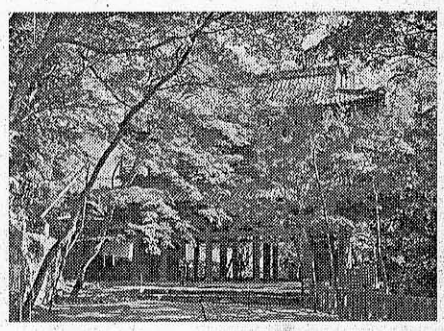
永源寺の開山である寂室元光（1290～1367）は、栗太郡田上（大津市田上）で禅の教えを志したのち、鎌倉の約翁徳倹に学び、さらに中国大陸に渡って研鑽を積みます。帰国後は室町幕府からの高名な寺の住持への任命を拒み続け、寺々を巡っていました。

そうした中で、康安元（1361）年、桑実寺に寓居していた寂室は近江国守護の六角氏頼（1326～1370）と出会います。氏頼は「仏神を敬い、道理を知る者」（『後愚昧記』）と評されるほど信仰心が篤かったとされており、寂室は氏頼から「山水眉目」な奥島（近江八幡市）と雷渓（永源寺周辺）を寄進されます。寂室は飯高山（高野山）を背に、愛知川の清流を眼前に見据えた雷渓の地を選び、同年そこに一寺を建てますが、これが永源寺創建の由来とされています。

寂室と氏頼の関係については、寺名を氏頼の法名「崇永」と、佐々木六角氏の姓氏「源氏」から一字ずつ採ったとされていること、貞治6（1367）年に寂室が死の直前に「自分が死んだ後は土地は氏頼に返還し、建物は地元高野村の父老に与えて各自立ち去るように」と書き残したことなどからも、その深さを窺うことができます。

寂室元光によって礎が築かれた永源寺は、以降も六角氏の援助のもと寺勢を拡大していきます。応仁の乱が京都で勃発すると、京都五山の名僧達が戦乱を避け各地に隠棲するなか、永源寺には五山文学を代表する横川景三・桃原瑞仙・景徐周麟らが訪れます。彼らが長らく逗留し永源寺の僧達と交流を重ねた背景には、すぐれた景観とともに、高い文化が当時の永源寺周辺に育まれていたことがあったと想像できます。しかしながら、応仁の乱以降、大檀越の六角氏は内紛により勢力は衰退、永源寺も幾度となく灰燼に帰し、衰退を余儀なくされます。永源寺が再興を遂げるのは江戸時代に入ってからで、ひとりの僧侶の登場を待つことになります。


永源寺開山堂


永源寺山門

寛永20（1643）年、第80世住持の一絲文守（1608～1646）が永源寺に入山します。岩倉家の出身だった一絲は、後水尾上皇や徳川秀忠の娘で後水尾の中宮であった東福門院など貴顕の帰依を受け、六角氏滅亡後、有力な後ろ盾を持たなかった永源寺の復興を進めます。一絲は戦火で失われた伽藍の再整備に尽力するとともに、『永源寂室和尚語録』を版行するなど、寂室の教えを世に伝えることにも心を砕きました。一絲の存在によって永源寺は貴顕の尊崇を得るとともに、金銭的バックアップによって衰退しかけていた永源寺の再整備を図ることができたことから、一絲をもって中興開山とされています。

永源寺は時をほぼ同じくして、彦根藩主井伊家の援助も受けるようにもなります。特に、四代藩主直興は第86代住持の南嶺慧詢（1629～1714）に深く帰依します。井伊家歴代藩主の中で、直興だけは永源寺に墓所を持っていますが、直興以降も永源寺と井伊家とのつながりは、明治になるまで保たれ続けます。

度重なる焼亡により、創建当時の姿を探ることが難しい永源寺ですが、江戸時代の絵図『瑞石山永源禅寺境致図』（永源寺蔵、栗東歴史民俗博物館寄託）が現在に伝えられています。19世紀以前に描かれたもので、なだらかな飯高山の懐に永源寺本坊が広がり、坊の前方には愛知川が横たわる姿を見ることができます。坊背後の山から愛知川に流れ込む滝も描かれており、寂室が「屋後青山　檻前流水」と謳った、山と水に囲まれた幽玄たる聖地の趣をよく伝えています。また、寂室が残した手紙『寂室元光消息』（京都国立博物館蔵）には、六角氏頼が斯波高経と対陣中にも関わらず寄付をしてくれたことに対する感謝の気持ちと、自分はたいしたことをしていないのに永源寺に留まり厚遇されている、という後悔の気持ちが綴られており、高僧の謙虚な心中をかいま見ることができます。

永源寺は、湖東の有力者達に厚く信仰された故に、幾多の戦火を浴びながらも再興を遂げ、今も美しい姿を見せてくれているのです。

（財団法人滋賀県文化財保護協会　松室孝樹）